開催地名	茨城県つくばみらい市
開催日時	令和６年２月 24 日（土）　13：00 ～ 14：30
開催場所	きらくやまふれあいの丘 世代ふれあいの館
語り部	菅野　澄枝　（宮城県仙台市）
参加者	防災士、自主防災組織、消防団　67 名
開催経緯	つくばみらい市では、大規模災害の経験が少なく、実際に大規模災害を経験した講師をお呼びして、自主防災組織などへの防災意識向上をはかるため。
内容	（１）はじめに 私が住んでいる仙台市宮城野区岩切地区は、沿岸部から内陸に向けて 10 キロほど入った地点で、直接の津波被害はなかった。近隣にある七北田川からの津波の逆流や、沿岸部の住民の避難といった影響は大きかった。また、地盤の関係で仙台市内でも宮城区は最大震度を記録し、岩切地区では本震並みの余震に襲われた。私の自宅を含めて全壊や半壊の世帯も多く出た。本震ひと月後、余震に襲われた時には心が折れそうにもなった。悲しくて思い出すのも辛いが、東日本大震災の犠牲者の方々の死因は、津波による溺死が圧倒的に多い。震災後 10 年経つと、被災者に対する様々な生活支援は終了していき、並行して行われてきた堤防の嵩上げや道路改良工事、住宅の建替えも一通り完了して震災前の生活が戻りつつあるが、被災地であるという事実はなくならない。安全な暮らしが戻ったとしても、一人一人の安心の保障が手に入ったわけではないと私は考える。それではどうしたら安心の保障を手に入れることができるのか。私はそれを追い求めて、全国各地でこのような講演をさせていただくとともに、学び続けている。 （２）仙台市地域防災リーダー（SBL） 東日本大震災が起こるおよそ９か月前の平成 22 年６月に、仙台市宮城野区の総合防災訓練で「岩切・女性たちの防災宣言」が発表された。当時の女性区長が「日中に大地震が発生したら､家にいるのは女性が多い｡女性の視点で防災対策を進める意義は大きい｡」と提案したのがきっかけだった。宣言は、仕事で夫や父親が家にいない状況での心の備えを促す言葉で構成され､「私たちは、ここ岩切でみんなが安心して暮らすために、自分たちでできることを考え行動します。大切な人の命を守るために。この地域で育つ子供たちのために｡」と結ばれている。 翌年に東日本大震災が発生し、大勢の被災者が避難を余儀なくされた非常事態の中で、防災宣言を作ったメンバーは自然と行動を起こした。そこから、仙台市防災リーダーという動きも始まった。 防災は、自分一人で取り組むものではない。みんなが自分の問題と思い、力を合わせて取り組むことで大きな力となる。仙台市防災リーダー（ＳＢＬ）は仙台市特有の地域防災の動きである。ＳＢＬの養成は仙台市が行っているが、実際の活動は町内会が主体であり、町内会を支援する組織である。現在は 774 人のＳＢＬがおり、そのうち、189 人が女性だ。 自主防災組織と協力し、その構成メンバーとして災害対策本部を運営した

	り、計画策定をしたり、平常時からの顔が見える関係作りも重要な業務といえる。やはり災害時に初めて見た顔が指示をするよりも、気心の通じた人間が声がけをするほうが、何事もスムーズに行くと思う。ＳＢＬは実働部隊という側面はもとより、地域住民に防災活動を啓蒙していくことも重要な任務である。 （３）まとめ 災害時には、自助、公助、共助という考え方が一般的だが、自助というのは、「自分の力だけで自立してください」というのとは違うと思う。私たちは「地縁力」と呼んでいるが、地域の中で心を通わせて何事に対しても他人事はない、という意識でもって助け合っていくことが肝要と思う。 避難所の煩雑で緊迫した状況の中では、リーダーに「どうしたらいいのか決めてください」と丸投げするのではなく、「今の状況を考えると、こうしたらいかがでしょうか」と提案する方がスムーズな意思決定につながる。お互いのことを思い合える状況があってこそ、自分で頑張る力が出てくる。地域というのは、そういった縁の積み重ねではないかと強く思う。 そして、無理なく、楽しく、末永く活動を継続していくことが重要である。一人では難しいことも、仲間と一緒に協力してあたれば、もう一歩上のステージに進んでいくことができる。そして、仲良しグループで無難に事を進めるのではなく、多様な意見を聞き、参考にすることで、よりよいアイデアや方法を見つけていくことも必要である。私の町だから当たり前に私が守る、私だけではできないから、みんなの力を集めて守っていくというスタンスで、是非皆さんの地域での防災活動を推進していただきたいと思う。
開催より	東日本大震災の体験談を交えながら、仙台市地域防災リーダー(SBL)としての活動をお話いただいた。本講演を受けて本市では、自主防災組織による自助・共助の取組支援など強化していきたい。